

生きがい

2023.8.16

「高澤先生の生きがいは何ですか」6月の県北地区中体連大会のときだった。ある人に、こう聞かれた。答えに窮してしまった。答えられなかった。そのときから、いつも頭の片隅に、「生きがい」の四文字がある。

なぜ、こんなことを聞かれることになったのか。その人は、小学生のときから、優秀なソフトテニスプレーヤーだった。中学生のときには、私のチームが何度も挑み、その度に跳ね返された。高校は、県外の強豪校に進学した。関東の大学に進み、卒業後に戻ってきた。

中学生のときには、指導者としての私を見ている。私の娘が中学生のときには、他校の指導者だった。県の選抜チームの練習では、娘たちの相手をしてもらった。このときは、保護者として娘たちを指導する私を見ている。

いろいろな話をした。テニスコートに行かなくなって、もう4年になるという話をした。そうしたら、「生きがいは何ですか」ときた。テニスをやらない、テニスコートにいない私が想像できないということなのだろう。ソフトテニス私の生きがいだと思っていたのだろう。

だが、実際には違う。テニスコートでの私の印象が強いことは否定しない。だからといって、生きがいかという、そうではない。生きがいであれば、今もテニスコートにいるはずである。めっきり、テニスコートには近づかなくなった。

こここのころ、「高澤先生は、どうするんですか」と聞かれる。3月で校長職をやめたあとに、何をするのかという質問である。クラブチームをつくらないのですか。外部コーチをやればいいのか。部活動指導員もあります。皆さん、誤解しているようである。いずれも私の頭の中にはない。

では、どうするのか。「生きがい」について考えた。今までの生きがいは何だったのか。やりがいならばあった。学級担任、国語の授業、生徒指導主事、進路指導主事、教務主任、部活動顧問、教頭職、そして校長職、対外的な仕事、どれをとっても十分にやりがいはあった。

生きがいがわからない。生きがいとは、生きるはりあい、幸せを感じるもの、生きる価値や経験を実現できるもの、生きることの喜び、人生の意味や価値、生きる原動力になるものだろうか。だとすれば、教員を続けていることだろうか。いや、そうは思えない。教員をやめても生きていける。

もしかしたら、教員をやめることによって、初めて生きがいに気づいたり、生きがいを見つけたりすることになるのだろうか。あるいは、教員として教育に携わっていることが、生きがいだったと気づくのだろうか。今のところ、「生きがい」の四文字が私のテーマとなっている。